

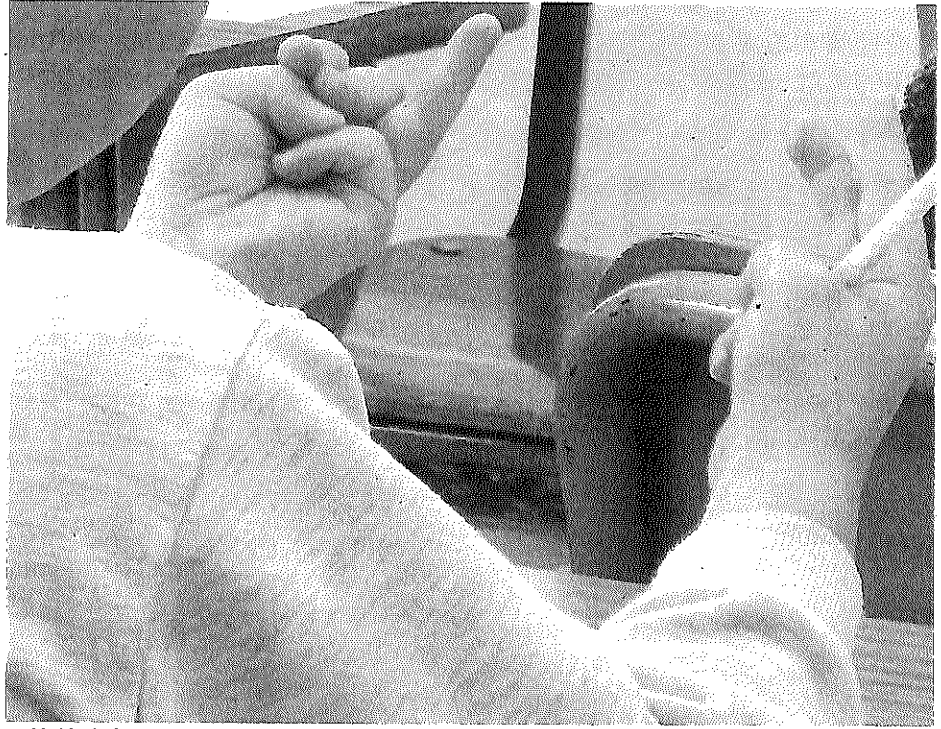
小1対象にスクリーニング検査 長野の取り組み

知的発達に遅れはなく、計算や文章題に著しい困難を示す「算数障害」。発達障害の中の学習障害の二つのタイプだ。早い段階で見付け、その子に合った支援につなげようと、取り組みを始める小学校が出てきている。

長野県御代田町の町立御代田北小学校で1月、1年生を対象に「算数障害スクリーニング検査」が一斉に行われた。

10までの足し算と引き算、繰り上がり繰り下がりのある20までの足し算と引き算。10問ずつ計4種類のプリントを、それぞれ時間制限を設けて解く。

主導する森山朋子教諭(58)が「はじめ」と声をかける。プリントをめくる子どもたち。白鳥聖美教諭(60)が机の間を歩く。指を使っている子や、手がまわってしまったり……。バインダーに挟んだ座席表で名前を確認する。



算数障害のスクリーニング検査に取り組む1年生。指を使って解く児童もいた＝1月、長野県御代田町の町立御代田北小学校

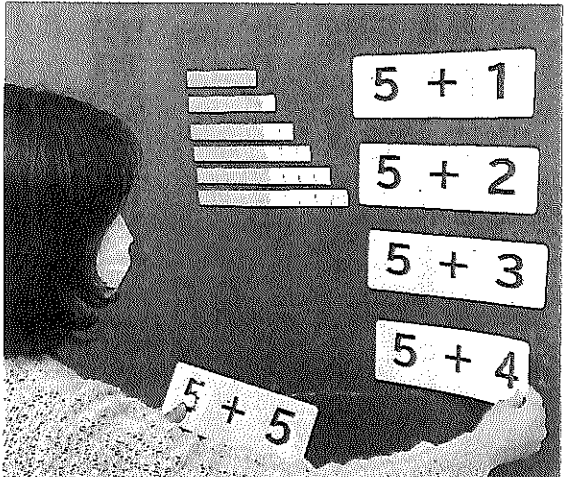
指を使う子・固まる子 早く見つけ支援へ

って意識的に習得させる必要がある。

御代田北小では、2023年度に算数障害のスクリーニング検査を始めた。学校では今後、気になる子への少人数指導を行う。2年生になり、九九が始まる秋までに、20までの足し算引き算が頭の中で瞬時にできる「自動化」を達成したい考えだ。

鈴木亜希子校長(54)は「打てる手はすべて打ちたい」と言う。中学校の数学でつまづいている生徒の「原点」を探っていくと、小学校低学年の算数に行き当たることがある。「分からないまま、だまって固まってしまう子は見過ごされがち。早い段階で見付け、その子に合った指導につなげたい」。そんな切実な思いがある。

長野県松本市の市立島内小学校では、24年度からスクリーニング検査を取り入れている。担当する山口佳子教諭(59)は「4年生ぐらいになって『算数で困っている』と相談されることが多い。低学年のうちはそのうち分かる」と放置され、高学年にさしかかる頃に『さすがにやばい』となるが、その頃には、



数が「いくつといくつ」でできているかを理解する力は、足し算や引き算に直結する。少人数指導で「5」が扱えるようになった子どもは、5より大きな数が「5といくつ」でできているかを学ぶ＝1月、長野県松本市の市立島内小学校

5作るじゃんけん・音読「分かる」経験を

目の前の課題を解決しても学年相応の学習には間に合わない状態になっている。低学年のうち手を打ちたいと考えていた。24年度は、11月に96人の子どもに検査を実施。10までの繰り上がり、繰り下がりのない足し算引き算で、10人超の子どもが困難を示した。25年度は2回にわけて8月に1回目をを行い、1年生110人のうち約20人に困難があった。

検査後は、気になった子どもを集め、朝の15分の時間を使って週1回計8回、少人数指導を実施する。

指導では、指で「2」を出したら「3」を出す、5を作るじゃんけんを1〜2回を割く。スムーズにできはじめると、4を出す時、折り曲げている、4を構成していない指の数が「答え」であることに気付く子がいる。「『なんだ、ここに答えあるじゃん!』と、とてもうれしそうだった」と山口教諭。「指導前はうつむきがちだったが、顔をあげて教室に戻るようになった」

算数障害を研究し、「算数障害スクリーニング検査」(Gakken)の共著がある山本ゆう・松本大学専任講師(43)によると、数の理解が苦手な子にとって、5といくつ数を理解させることは非常に大切だ。「1と4」「2と3」などで「5」が構成されていることを理解し、5という数を扱えるようになることは、5以上の数を理解する上での重要な中継地点になるという。

島内小の山口教諭はまた、足し算や引き算を九九のように音読させる宿題を出す。視覚情報からの理解がうまくいかない子に対し、聴覚情報を活用した指導内容になっている。山本専任講師は「それぞれの子ども得意な力に働きかける指導の工夫が大事だ」と言う。

算数障害のスクリーニング検査は、大阪府内の複数の市の小学校でも始まっている。また、山本専任講師からは、一斉スクリーニング検査をより簡便に、また自立した個別学習を進めやすいよう、新年度からアプリを使った教材の実証実験も始める。

「毎日の教室での学習で、置き去りにしてもいい子など一人もいない。1年生は学びに対して期待を抱いて入学してくる。この気持ちをくじくことなく、その子に合った学び方で『できる』『分かる』と思える経験を積ませたい」と話す。

(編集委員・山下知子)

◆感想や情報をお寄せください。お名前は104・8011 朝日新聞東京本社 社会部教育班へ。